

## ●「あしたば」(三重)

しっかりと構成の作品が揃っている。

「灰色の男」(安田ちかよ)は、シーザー光線によって現実の奇妙な仕組みを照らし出そうとする。前半はその方法で成功しているが、後半は奇妙な妥協により、緊張感が失せた。三芳公子の「姥捨て」は、エッセイ風のタッチで幻想の世界と眼前の世界とをダブらせ、エスプリの利いた語りを試みる。松原啓子の「青い小鳥」は、中学時代の同級会の連絡を受けて動揺し、出席してみても幻滅する。なつかしさと誤魔化さない。その精神の揺れを描く。落合禎子「河崎家のエコ生活」は生存と生活の境界線を往還する。文章にゆとりがある。竹内令が前号の同誌に載せられた安田ちかよの作品「紅絹の家」について論じている。丹念に読み、丁寧に評価していて、さわやかである。竹内はまたしっかりと構成の「『近代国語辞典の祖谷川士清』補遺(3)」をまとめている。考証が的確で注目に値する。別所澄「知らなかった時代『流公方記』より」も、確かな文章が光る。台湾文学で活躍した頼知の作品と生活態度について、山口玲子がいい作品に仕立てている。

「あとがき」に相当する欄は「勝手口」と題されているから、同人たちの意見交換の活発な模様が想像できる。「あとがき」は大事なメッセージを外に向けても発信する。

## ◆「文学街」(東京) 十二月号は力作がずらりと並んでいる。

岩谷征捷「文学街252―253に寄せる」は明晰な文体と諸作品に対する滋しみのまなざしをもった批評。「読む」とはこういうことだ」というメッセージが埋め込まれている。

島山拓「瓜二つ(その四)」はシユールの手法を組み込んだ

作品。文体が魅力。川島徹の「さいころ」は、定年後の時間の意味を人間関係に絡めて解きあかそうとする。愚痴や不満を超え、からりとした追跡が魅力。荒井登喜子「解放」は、「わすらわし」を超えたところにもう一つの「わすらわし」が生まれる逆説にぶつることを透視した作。通雅彦「東京の子供たち・王国」は、子供の生活空間の意味を手練り寄せた気品のある作品。子供の「トボス」、子供の「領分」あるいは「居場所」を描き出す筆力が見事。萬歳朱夏「轍」も子供の生活空間をふくよかにとらえた傑作。おしだとしこ「時の雨」はある家族が織りなした人生という襞を叙事詩のように描く。

綺羅星のような作品がぎゅと詰まった「文学街」は、全国に向かって「新しい文学よ、交流しよう」と呼び掛ける。

◆「山波」(愛知)が百五十号を迎えた。記念号である。「あとがき」で児玉幸子が同社の足跡を振り返りつつ、未来に向かうと呼び掛けている。瑞々しい「志」が伝わってくる。

記念号に因んで、今回は同人がこぞって作品を乗せている。①掌編。八人が書いた。井田邦彦の「(仮題)魔法の角笛」が鮮やかな展開を敢行しているが目立つ。

②特集「旅」。十一人が「旅」という比喩を、再解釈してからりとしたエッセーを書いている。じめじ執したところがなく前方は明るい。

③連載。五人が連載を載せている。中でも菊地裕介の「はた目」は六七回目になる。簡潔な時評は鋭い。富田裕の「前影遙かに遠く―戦士たちのララバイ」は、イスラム文化に対する考証が確かで、テーマの展開が揺るぎない。児玉幸子の「ハイデルベルク点景」は、エスプリの利いた文章が特徴。

(堀内守/名古屋大学名誉教授)